

「言いさし文」における「という」の諸用法

—終助詞的用法に関する一考察—

うえむら たかし
上村 昂史

京都大学大学院

uemura.takashi.34s@st.kyoto-u.ac.jp

キーワード：言いさし文、終助詞的用法、叙述の外部視点化（メタ化）

1. はじめに

近年、若者どうしの会話に耳を傾けてみると、(1) のように「という」が談話の末に置かれるような使われ方に気づく。

(1) 結局あの書類が必要だったという。

(A-21)¹

話し手は事務所に手続きする用があり、要るか要らないか判断しかねた書類を不要と早合点し持参しなかったために、手続きができなかったことを友人に語っている。このような「という」は、伝統的な日本語文法の観点では「不完全な文」として扱われる。以下この観点について掘り下げて述べる。

従来の日本語文法では「という」について 3 つの用法が見られる。1 つ目は、引用辞の「と」に発話行為動詞「言う」が結合した構成的に意味を成す「と言う」である。2 つ目は、引用および伝聞を示す「という」である。本来的な「言う」の意味が薄れ、先行する内容が、たとえば書籍や資料から引いてきたものか、または話し手とは別の誰かから聞き知ったものであることを示す用法である。最後に、3 つ目は「A という B」の形式で、一方が他方を修飾しているか、その内容説明になる用法である。

(2) 道子さんはすぐに行くと言いました。

(3) 彼女の到着が一日遅れるという連絡が入った。

(4) 飛行機が次に着いたのは、エベスという小さな町だった。

(グループ・ジャマシイ 1998)

これら従来の用法と上掲の (1) を照合しようとする、いずれの用法にも完全には当てはまらない。まず、発話行為動詞「言う」の用法とは異なることは明白である。2 つ目の引用および伝聞の用法とは、確かに「という。」で言い切りの形式が可能なので、形式上は当てはまるとも考えられる。しかし、話し手が自身の経験を述べている発話内容が引用お

よび伝聞であるとは言い難く、意味および機能レベルでは整合しないことが言える。3 目の内容説明および名詞修飾と捉えるのは、たしかに後ろにコンテキストを補えばそのような解釈も可能なように思われるが、形式が異なる。したがって、これら 3 つの用法に (1) のような用法を当てはめる場合、話し手が文を完結させていない「言いさし」での事象叙述と捉えるのが伝統的な日本語文法における見方とすることができる。

しかし、このような後件を持たない「という (つていう)」の用法が話し言葉に存在していることは Ohori (1995, 2000) の指摘をはじめ、加藤 (2010) および甲田 (2013) においても示されている。いずれも個別の例を挙げ、「という (つていう)」がどのような振る舞いを見せているのかについて示すにとどまるものの、その発話の終結性や話者の心的態度について論じており、独立した機能の存在を示唆している。

さらに、白川 (2009) を代表として、このような「言いさし文」を独立した文とみなすことができるとした研究も存在している。「言いさし文」には本来従属節と主節をつなぐ接続助詞に着目した研究が多い。「という」の場合、3 つ目の用法のみ後件を必要とし、他 2 つの用法には必要ない点は接続助詞の場合と異なるが、用法上の親和性を考慮すれば、「言いさし文」の一例として分析を適用できる。

本稿は「言いさし文」研究の分析手法を用いて、話し言葉レベルにおける「という」のあり方に着目した記述を行う。そして、とりわけ若年層の談話における用法には「言いさし」ではなく、「言い終わり」の場合があることを示す。その際、当該の用法に終助詞的用法と捉えられるのではないかという点に言及し、いかなる発話態度が示されているのかについて見たのち、その成因や語用化プロセスについて考察する。

2. 従来の記述と「言いさし文」の研究背景

2.1 白川 (2009) — 「関係づけ」と「言い尽くし」

従来の日本語文法において「言いさし」として不完全な文とされてきたものについて、白川 (2009) は、3 つの下位カテゴリーを設けている。

表 1 「言いさし文」の類型

	関係づけ	言い尽くし	言い残し
主節の非存在	+	+	+
発話内容の完結性	+	+	—
関係づけられるべき事態の文脈上の存否	+	—	—

(白川 2009: 11)

表 1 の右側にある「言い残し」は、話者が本来補われるべき内容が発話に実現されていないものを指すため、「言いさし文」研究の対象から外れる。対象となるのは、表 1 の「関係づけ」および「言い尽くし」である。この 2 つについて、白川 (2009) は「言い終わり」

であるとしている。伝統的な観点では文における従属節とは主節を必要とするものとして捉えられていたために、両者も未完結の文として見られていたが、「言いさし文」研究では、双方にも「発話内容の完結性」が存在していると捉えている。そのうち関連のある事態が先行する文脈から推測可能なものを「関係づけ」、その関連がなく発話が単独で完結しているものを「言い尽くし」と呼んでいる²。

本研究において対象となる「という」の用法も大まかに「関係づけ」と「言い尽くし」に分類されうるものである。では、なぜこの2つのカテゴリーが未完結な文から除外して考えられるべきなのか、2.2節で先行研究を概観しながら述べる。

2.2 「言いさし文」— 先行研究

「言いさし文」には「『言い終わり』の文」が存在しているという示唆は既に1950年代から存在しているが³、記述文法の枠組で研究が着手されるようになったのは1990年代からであり、比較的新しい研究分野ともいえる。個別の事例研究としては白川 (1991, 1996)、佐藤 (1993)、三原 (1995) などが代表的である。そして、2.1節で挙げた白川 (2009) でようやく総体的な研究がなされる。白川 (2009) は「言いさし文」をなすフレーズを網羅的に扱い、それぞれの語用レベル機能について詳細な記述に取り組んでいるだけでなく、日本語文法での位置づけも論じている。本節では、上に示した白川の分析を土台として「言いさし文」の完結性をどう裏付けているのかについて概観する⁴。

1990年代以降の研究で、「言い終わり」が指摘されているのは主に接続助詞においてである。接続助詞は従属節と主節の関係を示すものであった。しかし、「言い終わり」を主張する研究者は、補われるべき主節と従属節との連関が、従来の記述の接続機能では整合性を保つことが難しいこと、および文脈上に存在しないことを主張の裏付けとして用いている。たとえば、(5) は「言い尽くし」のうち「倒置的用法」であるが、(5)' のように通常「主節+従節」の順でも、その関係が原文通りの逆接とは言い難いとしている。

- (5) 響子 「なんで学生服なんて、持ってるんです？」
 五代 「はぁ…予備校の入学式に着てくればあちゃんが送ってきたんですよー、結局着なかったけど。」

- (5)' ?結局着なかったけど、ばあちゃんが送ってきたんですよー。
 (白川 2009: 17, 高橋留美子『めぞん一刻⑤』 p.178)

一方、「関係づけ」の場合には、上述の「言い尽くし」とは多少異なる分析から文の完結性を論じている。たとえば、「関係づけ」に分類されているもののひとつであるカラ節の場合、白川 (2009: 95ff.) は「からだ」とは言い換えにくい文例を提示し、従来の「理由や原因を説明する」という記述で示されて来た関係性では、この違いについての説明が明確ではないことを示した上で「言い終りのしくみが異なる」ことを論じている。

- (6) 謙作「一本、付き合うぞ。」
 則子「無理にいいわよ」
 謙作「あとあとといわれるからな。」
 則子「いらないわ」
- (6)' 謙作「一本、付き合うぞ。」
 則子「無理にいいわよ」
 謙作「#あとあとといわれるからだ。」
 則子「いらないわ」

(白川 2009: 96f., 下線は引用元)

このように、補われるべき内容との接続関係が、従来の日本語文法で言われている関係だけを示している訳ではない点から、むしろ「言い終わり」により文が完結したものとして説明した方がより説得的でないかという主張がなされている。

また、このような文脈の整合性の他に完結性を判断する基準を設けている先行研究もある。曹 (2000: 90) では「言い終わり」の「けれど」を判断する際に、話者交代の有無を基準に入れている。話者が単独で話す場合や同時発話、割り込みが明らかにある場合を除き、この基準も有効であると言える。

それから、音韻レベルでも文の切れ目を判断できる。三枝 (1999: 10) は、「という」のくだけた談話で出現する「ってば (ったら)」の終助詞的用法を指摘する際に、文末イントネーションを有する点を裏付けに用いている。したがって、本研究ではテキストレベルにおける分析を中心とし、得られた範囲内で音韻レベルの分析も行う。

3. 談話における「という」

3.1 「関係づけ」の「という」

この節で扱う用法は、先行する発話との「関係づけ」のタイプである。下位区分としては (a.) 先行する発話における命題に説明（または注釈）を加えるもの、そして (b.) 先行する話し相手の発話を話者自身によって言い換えるものの二つに分けられる。

まず、(a.) の用法について見る。(7) は携帯電話の契約の際、支払い期間と回数に関する質問についてのもの、(8) はあるバラエティ番組において交わされた芸人どうしの会話をトランスクリプトしたものである。

(7) A: 24回26ヶ月っていうのはなんでですか？

B: ダブるんですよ。今月の分は来月請求という形で最終的に支払いが終わるのが26ヶ月後という。

(A-14)

(8) 01 宮迫: 最近こういうの多くないですか(→)

02 浜田: |多いね|(1.0)多い

03 一同: |あー

04 宮迫: どっかに集められてジャージっていう(↓)

05 (爆笑)

06 松本: (xxx) あの(-)パンツはきかえなあかんパターン(でしょ)(↑)

(D-1, リンカーン, 0:27-0:33)

(7)' *今月の分は来月請求という形で最終的に支払いが終わるのが 26 ケ月というダブルンですよー

(8)' *どっかに集められてジャージっていう多くないですか

双方の文例において、「という」が出現している発話が、ある命題に対する理由づけや説明となっている。(7) では、話者 A による 24 回 26 ケ月の支払い回数と支払期間が一致しないのは何故かという質問に対して、話者 B は、まず「ダブる」と述べて、その理由として口座引き落としがない月がある関係で期間が長くなると説明を続けている。これらの文例を内容説明の「という」の後件が省略されたと捉えるには多少難がある。というのも、(7)' および (8)' に示した通り、文例の前後に補うべき文脈が「という」ではクリアに接続することができないため、語用レベルでは話者 B は話者 A の質問に「という」以前で答えを完了させていると考えられるからである。

文例 (8) の談話は、熱海のある島を舞台に、「姫役」として出演している女性を探して「救う」という、あるバラエティ番組における企画の冒頭から得られたものである。話者(宮迫)は出演しているバラエティ番組の企画のパターンに同じようなものが多いと第 01 行目で述べ、途中他の話者のあいづちを挟んで、第 04 行目に示した同じ話者の発話で「という」のくだけた形態である「っていう」が出現している。発話内容を考慮すれば第 01 行目と第 04 行目の内容を関係づけることができる。この文例では、「っていう」が文末イントネーションで終わっている。よって、形式的には話者は発話を言い終わっており、その発話が意味上先行する文脈と関係しているといえる。

したがって、これらの文例は単なる「A という B」における後件の省略や言い残しとして未完結な発話として捉えるよりも、話者が「回答への理由づけ」や「追加情報の提供」などの説明内容を「という」で示していると分析すれば、より文例の文脈に即した説明が可能であるということが出来るだろう。

ところが、上記の文例に限れば、従来の日本語文法に即した見方により説明が不可能な訳ではない。たとえば、厳密な「という」の接続とは捉えずに (7) では「～ということなんですよ」というフレーズの省略として、また (8) では「ということ多くないですか」の倒置として分析すれば、上掲の文例について説得力を維持した説明が可能である。しかし、次に示す (9) の場合はどうであろうか。

- (9) 01 ユースケ: [...] 一番のターニングポイント何だったんですかと
 02 ピエール: ま僕 (.) デビューしたことですかねやっぱりー(.)
 03 バンド結成からー(↑)!(1.0)
 04 ユースケ: |はい
 05 まメジャーデビューっていうところでー(↓)
 06 ユースケ: (小声で) それが一番のターニングポイント
 07 ピエール: そうだよー(0.5)お金もらえるようになったって[h]いうね[hh]
 (D-6, ミュージックジャパン, 25:27-25:40)

- (9)' ?お金もらえるようになったっていうことなので、(デビューしたことが) 一番のターニングポイントです。

ここでは、インタビューを受けているミュージシャンにとっての人生における「一番のターニングポイント」を司会者に訊かれ、話者はそれが「デビュー時」とであると述べた上で、第03行目に、その理由とも思しき発話が続いている。しかし、(9)' が示すように双方の発話を組み合わせると、因果関係が整合的とはいえず、また本来あるべきニュアンスも変化してしまっていると考えられる⁵。

加えて、(10) は冒頭の (b.) に示した分類で、話者の先行する発話の「言い換え」と捉えることが出来る文例であり、今回の調査では3例得られた。

- (10) A: ただ、そんなことして役に立つのかが心配なんです。

B: あー学問的に有意かっていうね。

(A-3)

ここでは、話者 A は自身が従事する研究の意義に不安を抱いている点を話者 B に述べている状況である。話者 B の応答における「っていうね」に先行する部分は、話者 A の発話した「そんなことして役に立つのか」を話者自身の言葉に換言したものと見て取れる。(10) に関しても「関係づけ」という性格上、「A という B」が持つ説明的用法あるいはメタ言語的機能が引き継がれていることが導かれる⁶。

ここで、(7) から (9) を改めて見直すと、「という」の出現する発話の部分が、先行する文脈との言い換えとも解釈できることに気づく。まず、(7) は「ダブる」という先行の発話をパラフレーズしたもの、(8) は「こういうの」との照応、そして (9) は、関連する話者の記憶との連想と、幅広い関係性での言い換えが「という」によって示されている側面が、新たに浮き彫りになってくる。

(7) から (10) までの事例を包括的に説明するとすれば、「関係づけ」の「という」を、先行する発話の等位的な言い換えによる説明の提示と捉えるのが妥当ではないかと考える。すなわち、因果関係や論理的な関係だけでなく、話し手に命題となる事態からの連想や忖

意的なリンクという形での説明をも含みうるとすれば、より網羅的な説明が「関係づけ」の「という」として分類した文例においては可能であると言えると考える。

3.2 「言い尽くし」の「という」

前節とは異なり、このタイプに属する用法では、先行する発話との前後関係が認められず、その発話で内容が完結している。便宜的に、(a.) 発話内容が話者に現前する事物および話者に起こった事態を叙述するタイプ、および (b.) 話者自身の行動や心理などが対象となるタイプに分けてみるができる。

(11) はっと起きて時計見たら時間ぎりぎりという。

(A-27)

(12) 01 清水建設って色々な人がいるなってゆう(↓)

02 それがこうひとつになってこの形になっていうてゆ(-)(↓)

(D-4, 清水建設)

(13) 01 T: より(-)I

02 U: Iより I

03 T: I完成度が高いものを

04 U: はい、ええ(↓)

05 Y: まー一応は(0.9)完成度はー(0.8)じゅ(.)うじゅ(.)完成度は高くはしたつもりで

06 はいるんですけどただー(1.0)何かー(0.3)うっすーいなーって思って[h-hh-]

07 完成度が高いってゆうのとー(↓)(0.8)

08 [s] 中身が濃いつてゆうのとはちょっと違うかなってゆうー(↓)[hh-]

(D-5)

まず、(a.) のタイプについて見る。(11) では、昼寝をしたら寝坊して集合時刻に遅れそうになった話者自身の経験を述べており、(12) では、ある企業に勤める女性が、自身が従事する職場における多彩な人材について描写をして、その人材の発想が形となって行く様を述べている。そして (13) は、口頭発表に臨む話者 Y が発表内容に不安があることを述べている状況で交わされた会話である。話者 T の発話を受けて、へりくだった返答として、発表構成の完成度と発表内容の良し悪しは別問題であることを述べている。いずれも、内容説明の用法に類似した機能が窺えるが、後述するように話者が他人の視点から描写し、あたかも引用および伝聞用法のような口調で述べようとする発話態度が見て取れる。

(b.) についても同様である。このタイプでは、話者の外の事態ではなく、話者の心理が叙述の対象となり、話者の発話内容の時点で話者が持った感情の反映を示したり、心中に持った考えを示したりする用法である。

(14) 「そういうことじゃねえ」っていう。

(A-31)

インターネットの検索では、(a.) に分類されるのが 8 割を超え、(b.) に分類されるものよりはるかに多くの例が得られた。また数例を除き、出現する文例のほとんどには、いわゆるチャット用語で「笑い」を示す記号がついていた。

(15) 布袋 [...] そんな中、本物の音楽ファンのあいだで語られている“大橋トリオの評判”が耳に入ってきて、iTunes store で『I Got Rhythm?』を購入したのがもうずいぶん前で。しかも僕はなぜか二度ダウンロードしてしまったという (笑)。二度ダウンロードするぐらい彼の音楽が好きなんですね (笑)。

(C-24, 布袋×大橋, 太字は引用元まま, 下線は筆者)

(16) 仕事が無いときは、ひたすらオーディションを受ける日々です。多いときは 1 週間に 1 度くらい。毎週受けて毎週落ちるという (笑)

(C-58, あなたに, 下線は筆者)

また、収集した文例の 9 割超が、否定的文脈を伴い使用されている。冒頭の (1) や (11) および (14) のように望ましくない事態への驚きや抗弁、(13)、(15)、(16) のような謙譲や自嘲風の表現、また以下の (17) のような他者の否定的評価を伴うことが 9 割を超え、(12) のような肯定的内容あるいは中立的な内容をともなう文例はごく少数であった。

(17) そこ (の机) に座ってるのが坊主という。ちょっと気持ち悪いという。

(A-26)

3.3 終助詞的機能の示唆

三枝 (1999: 10f.) では、「という」の条件形「ってば (たら)」の終助詞的用法が指摘されている。同所では、「ってば (たら)」が提題化の働きを有することを述べたうえで、これが文末および句末に終助詞のようにおかれる場合、話者の平叙文では反論や「抗弁」、命令文では「命令のだめ押しの感」といった発話伝達態度を示すものであると記述している。

(18) a 「早く来ないと、ガードマンに見つかるぜ！」

b 「わかってるってば！」

(19) ふざけないでったら。

(三枝 1999: 10, 下線は引用元)

この事例と同様に「言い尽くし」の「という」にもある特定の終助詞的な機能、すなわち発話が終了する標識として機能し、話者の発話伝達態度がある可能性を示す。

3.2節で見たように、「言い尽くし」の「という」に分類されうる文例は話者の否定的評価を伴う。この傾向を、別の角度から見ることにしよう。試しに(1)から「という」を除いた文例を実験的に作って、その有無でどのような相違があるのか検討する。

(1)' 結局あの書類が必要だった。

他の母語話者にニュアンスの違いがあるかどうか質問をしたところ、話し手の視点に関し違いがあることが認められた。(1)は「あたかも他人が話している」または「傍観的な立場から語っている」ニュアンスがあるという。それに対し、(1)'ではそれが失われ、話者が自身の記憶にある事態をそのまま描写しているに過ぎない、単なる事象叙述の文になるという意見を得た。これは、筆者の語感にも適合した意見であると言える。

このことに関して先行研究における指摘が興味深い。まず、甲田(2013: 435ff.)は、「という」のくだけた形式「っていう」の後続部がない会話データを挙げ、発話の終結部の「シグナル」となっている点と、先行する修飾部の情報を「際立たせ、卓立性を持たせる」機能がある点を指摘している。これは、発話終了の標識として「という」が用いられることを主張するものである。

次に話者の心的態度に関するものであるが、Ohori(1995: 214f.)は「という」が先行する内容と話者との距離感を示していると述べており、心理的に遠ざけたい、または情報源を曖昧にし、他人事として扱う効果があると指摘している。また、メイナード(2008: 76-81)でも、本稿で「言い尽くし」の「という」に分類した用法と類似するものを「疑似会話修飾節」と呼び、そこに「責任逃れ」の機能を挙げている。

したがって、話者自身の身上に起こった出来事や話者の心理にも拘らず、否定的内容の事態を直視せず皮肉をこめる「斜に構えた態度」が「という」によって表現されることが多いと考えられる。

4. 叙述のメタ化

4.1 ヤコブソンの「メタ言語」

3節でみた「という」の用法について、とりわけ「言い尽くし」の場合に「斜に構える」態度をなぜ示しうるのかについて説明を試みる。その際、キーポイントとなるのが「外部世界の視点」という概念である。これは対象言語(object language)が表わす世界の外部に立ち「叙述のメタ化」を可能にする視点である。この「叙述のメタ化」とは、言語学で「言語を記述するための言語」とは意味するところが多少異なる。そのため、本論におけるメタ表現という術語を定義することから始める。

Jakobson(1980)によると、言語には6つの機能を備え、そのひとつに「コード」と言われる機能があると想定している。コードは、話し手と聞き手のコミュニケーションを媒介

する諸要素の体系として提示されている。このコードに発話の焦点が当たる場合、その発話はメタ言語的 (metalingual) であると Jakobson のコミュニケーション論では捉えられている。たとえば、聞き手が話し手と意思疎通が取れない場合に「それはどういう意味ですか？」とコード自体の意味を訊く場合に使用される。この理論におけるメタ言語は、先の「言語を記述するための言語」という記述文法の道具としての言語と理解するよりは、むしろ「話し手の発話における内容や意図を理解するための発話」として、人間のコミュニケーションを円滑にするための道具と理解する方がよい。

本稿で用いる「メタ表現」とは、上述のように現実世界を超えた高次元の世界、あるいは現実世界の外部における世界で作用する点では同じである。すなわち、「現実世界を描写した表現を理解するための表現」ではある。しかし、「話し手の把握した世界をどうとらえるか」という要素を含んでいることに鑑み、筆者はこの「メタ表現」を人間のコミュニケーションに視点を置いたものだけでなく、人間の会話における視点を反映している機能のひとつと定義し、次節において更に掘り下げて説明を行う。

4.2 メタ化＝外部視点化

本節では、話し手と聞き手におけるそれぞれのもつ視点が何を表現しているのかという点を明らかにする。まず、「外部視点化」とはいかなる視点の移動のことを指しているのか、そして「叙述のメタ化」とはいかなるプロセスか、発話状況の一部を簡単なモデルに示して、その輪郭を示す。

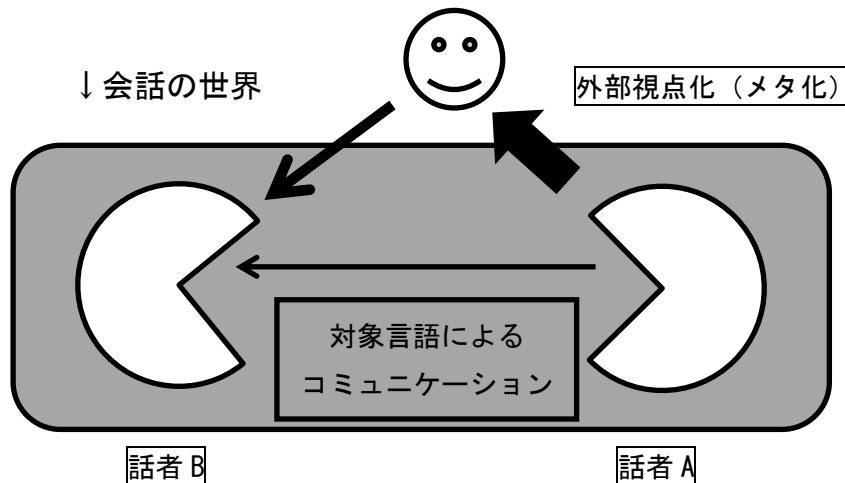


図1 叙述のメタ化における話者の視点

図1では、会話が行われている現実世界と2名の話者、さらに、その外に「外部世界の視点」を想定している。ある叙述が話し手により対象言語で行われ、それが聞き手へと伝えられる場合、灰色の四角で示した現実世界の中で、発話が話者Aから話者Bへと直接届くものといえる。一方、叙述がメタ化される場合、内容は現実世界の叙述に他ならないが、話し手の視点に異なりが生じる。話し手は、現実世界の枠の外にいる「外部世界の視点に

立つ者」を参照点として、あたかも外の世界から聞き手へと発話が行われているように表現することができるのである。したがって、外部世界からの叙述という側面から、それに付随して対象言語の世界を避け、皮肉を込めるような発話態度が生じたと考えられる⁷。

この叙述のメタ化に、「という」が寄与していると考えることには、以下の理由が挙げられる。三枝(1999: 8) および加藤(2010: 208ff.) によると、引用の「と」が陳述をメタ言語化する作用を有しており、「と」の話し言葉レベルでの形態「って」が「概念を受けるもの」であり、「述部に状態述語が来て、主題の属性、性質を述べ、定義付け、説明の働きを持つ使い方が普通」であり『メタ言語文』では『って』が使われる」と述べている。一方、「という」にも本来引用の「と」が入っていることから、上述のメタ言語化としての定義に従う。そして、発話内容の叙述をしていることについても異なりはないので、それらのメタ化が起こっていると説明できる。しかし、この説明の裏付けとして、語用レベルで終助詞的な「という」が、名詞修飾の機能を引き継いでおり、形式として発話者とは異なる者の発話という視点を示す引用および伝聞用法の形式との共通項を、改めて検討しなければならない。

5. 語用レベルの機能を獲得するまでのプロセス

本節では、「言い尽くし」の「という」が4節で提示したモデルに見合う機能を残しているかについて検討する。そして、語用化のプロセスを、従来記述されていた機能と「という」の新用法との関連を明らかにしつつ提示する。

本研究では、従来の記述から「言い終わり」の「という」が出現したメカニズムを、文法化ではなく語用化のひとつとして捉える。文法化とは、狭い定義に従えば一定の期間を経て内容語が機能語へ変化するプロセスであり、その対象は形態および統語レベルの現象である⁸。また、意味の漂白化を扱う点でそのプロセスは一方向的である。一方、語用化とは、談話標識に顕著なように、談話における新たな意味の獲得が論点となる⁹。それゆえ、共時レベルの現象であり、多くの場合一方向プロセスでは集約できず、複数の要因が絡み合って出現するものであり、上述の狭義の文法化とは性質を異にするとと言える¹⁰。

その反面、従来の記述における本動詞「言う」を含む用法から、引用および伝聞的用法と名詞修飾および内容説明の用法には、意味の漂白化が見られることを考慮して、文法化と捉えた方がよい一方向的プロセスが見いだせる。以降、本節では、その違いに留意しながら本動詞「言う」から「言い尽くし」の「という」までの相互関係について述べることにする。

1節で述べたように、従来の記述によれば「という」で文を終わらせることは本動詞では可能だが限定的であり、引用・伝聞としての用法では可能、そして名詞修飾の場合は不可能であった。そして4.2節で見たように「という」がメタ言語で果たす役割は名詞修飾の用法であるといえる。そのため、一見すると「という」の新用法は形式上、メタ表現には適さないのではないかという意見も考えられる。

しかしながら、新用法の文例においても文末に何かしら語を補ってみると、これが名詞

修飾の場合と同じ機能を果たしていると言える。このことは、3 節で挙げた「関係づけ」と「言い尽くし」の2つのカテゴリーにおける文例に、それぞれ何かしら語を補えば明白になる。たとえば、(1) には、(20) に示すようなコンテキストが補える。

(20) [(1)より] 結局あの書類が必要だったという事態

したがって、コンテキストの背景化が何らかの形で行われ、「A という B」の形式が解消に向かったものといえる。

そのコンテキストの背景化の中途段階を示していると位置づけられる文例が現時点の調査で数多く得られた。(21) および (22) は引用および伝聞用法だが、説明的用法への中間段階にある。(21) は、ある週刊誌の記事の内容を「という」以前で引用しており、一旦文に区切りをつけて、その後部にソ系指示詞の照応により先行する発話を締めくくっている例である。(22) では、小説の主人公が、「景浦」という人物から聞いた話を主人公の姉に語る場面で、先行する話の言い換えとも読み取れるが、引用という機能を未だ残しているとも言える点で、双方の用法の中間的な様相を示している。

(21) 要約すると、提示された脳年齢が実際の自分の年より低いと同程度だった場合、次回に行った時に前回よりも高いと気分的に何度もやり直すパターンが多く、場合によっては鬱になるという…そんな話です。

(C-201, 脳トレ)

(22) 「景浦が言っていた言葉——大和が沈められるのがわかっていて沖縄に向かったという話。無駄死になんだけれど、沖縄で戦う人たちを見殺しには出来ないっていう」
姉は真剣な目で僕を見つめた。

「おじいさんは多くの特攻機を見送って——その中には自分の教え子も沢山いて、自分一人が生き残ることは出来ないって思ったんじゃないのかな」

(A-43, ゼロ, p.508, 下線部は筆者)

これらの文例は、コンテキストの背景化が起こる前段階に、「という」による前件と後件の接続という特性が弱まり、統語レベルの自由度が増したことが窺える。すなわち、これら上掲の影響で「という」の接続も談話においては分割されやすいといえる¹¹。

このように、「という」の終助詞的振る舞いの成因としてコンテキストの背景化が起きていること、そしてその中間段階として引用および伝聞の用法が説明的用法のように振る舞うことがあることを示した。ゆえに本動詞「言う」から引用および伝聞表現や名詞修飾および内容説明の用法が派生する文法化プロセスと、そこから談話において「言い終わり」の「言いさし文」である「関係づけ」や「言い尽くし」の用法においてなされた語用的意味の獲得を描くプロセスは図2のように提示される。

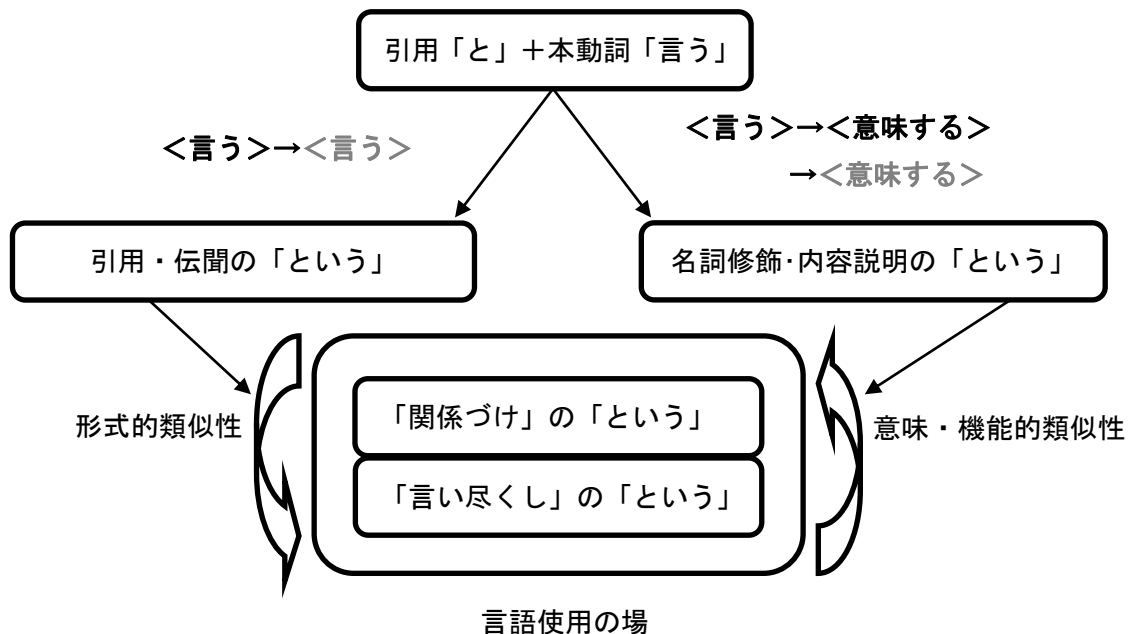


図2 語用レベルの機能獲得プロセス

従来の用法のうち、「と」+「言う」を、本来の意味を有した用法として起点に位置付けた。まず、この本来の用法からの意味の漂白化について述べる。引用および伝聞表現においては、「言う」の本来の意味が薄れ、単にある発話の引用や伝聞の機能を担うものとして漂白化が起ったと分析できる。一方、名詞修飾および内容説明の用法では動詞「言う」が本来の発話行為としての意味の<言う>¹² から<意味する>に転化し、同じく漂白化が起こった用法であるといえる。そこから、会話の流れによってコンテキストが背景化されることで、現場世界の外部視点から叙述するというメタ表現的な発話伝達態度を示す終助詞的用法が生まれたと考えられる。その背景化に寄与した影響は、文末に置かれるという形式上の類似性という点も挙げられるが、引用および伝聞表現が説明的文脈で用いられるケースが挙げられる。そのため、「という」が終助詞的振る舞いを見せるプロセスには複数の影響が相互に重っていることが見いだせる。その段階を経て「関係づけ」の「という」ではリンクされる文脈が先行しても、また「言い尽くし」の「という」では文脈が消滅しても使用が可能になったと考えられる。このプロセスにはもう1つ、言語使用の場における動機づけも関与していると考えられる。たとえば、話者の心的態度としては、ある事態に心理的な距離を取り、外部からの視点で語ろうとするコンテキストに「言い尽くし」の「という」が適するものとして選択されたといえる。また、「関係づけ」の「という」に関しては、「言い尽くし」のケースほどコンテキストの制限はないものの甲田(2013)が述べる「情報の卓立」により派生したものではないかと考えられる。

6. まとめと今後の展望

本稿では、近年研究が盛んな「言いさし文」の分析手法を用いて、前件と後件を接続する「という」の用法について従来の日本語文法の見方とは異なる観点から記述を行った。本研究の対象となった用法は、前後の文脈関係と「関係づけ」が可能な用法と、その限りではなく話し手が「言い終えた」と見て取れる用法に大別された。さらに、その下位区分として、前者には説明や言い換えを行う用法、後者には現前する事態や話者の心理に関する外部視点からの叙述をする用法があることを示した。この分類をもとに、談話における「という」の機能の説明を行い、とくに先述した後者の用法については叙述を「外部視点化」する意味での「メタ化」の働きがあることを指摘した。最後に、従来記述されていた用法からの語用論化プロセスについて説明を試みた。

今後の研究課題としては3点挙げられる。まず、本稿で取り上げた「終助詞的な用法」が実際の使用場面で、どの程度定着しているのかについて実態調査を進めることである。この調査をもとに、「言い終わり」の「という」の諸用法の社会言語学的位置づけについて検討する。2点目は、相手の発話のあいづちとして頻繁に出現する「というね」についてである。これを構成的に「という」＋「ね」に区分するのか、あるいは固定化した表現として、「という」単独の場合と独立していると捉えるかは、いまだ本稿で論じる段階ではなく、さらに検討が必要である。3点目は、「という」と「っていう」には用法上差異があるかどうかについての検討である。本研究の範囲内では顕著な違いは見られなかったが、加藤 (2010) の「と」および「って」の機能的相違に関する指摘に鑑み、両者を同列に扱ってよいとは断定し難い。

注

1. 文例は1.) 研究者により収集された文例 (A)、2.) 研究者自身の内省による作例 (B)、3.) インターネットの検索で得た計およそ 100 万件ヒット中ランダムに 100 例程度を抽出したテキスト類 (C) そして 4.) テレビ番組やインターネット上の動画から得られた音声データのトランスクリプト (D) を総計しておよそ 200 例にのぼる。文例下のカッコ内に分類が付され、アルファベットは上述のカテゴリーに当たる。なお、小説やテレビ番組からの引用には、併せてタイトルと引用箇所を明記する。
2. また、白川 (2009: 11) では「関係づけ」の「言いさし文」には「関係づけられるべき事態が文脈上に存在する」としている。
3. 三上 (1955: 274) を参照のこと。
4. 「言い終わり」は主に白川による研究で用いられている術語である。一方、「言いさし」という枠組みで研究されていない研究にも、いわゆる「終助詞化」や「終助詞的用法」として接続助詞を伴う文の完結性を研究した論文も見られる。
5. 理由は2つ挙げられる。まず、当該の発話は論理的理由を示しているのではなく、話者が有する心理の一端を追加的に示すという主観的な説明と理解すべきであること

が挙げられる。次に、話者の主観的な理由づけを容認したとしても、従来の枠組みでは話者の主観を「～ということ」では示しにくいこと（グループ・ジャマシイ 1998）が挙げられよう。また、1 つ目に挙げた理由から、情報構造として独立した主節が並列する関係が (10)' では「従属節＋主節」として統合されるためニュアンスの違いが生まれていると考えられる。

6. 加藤 (2010: 112ff.) を参照のこと。
7. その他、事例ごとの分析についてはメイナード (2008: 81) 、加藤 (2010: 236) および甲田 (2013: 435ff.) を参照のこと。
8. この箇所の議論は Lehmann (1995) に基づいている。もっとも、文法化の定義に語用の場における新たな意味の獲得という点を盛り込むのであれば、本研究の事例も文法化の 1 つとして捉えることができる。この立場に関しては Hopper (1998) および Traugott (2003) を参照のこと。
9. Mroczynski (2012: 85 ff.) を参照のこと。
10. 広義の文法化では語用化を含むことが論じられている。
11. 加藤 (2010: 114) に同様の指摘がなされている。
12. <> は意義素を示し、音声や書記形式を示す通常のカギ括弧（「 」）とは区別する。

参考文献

- Hopper, Paul. 1998. Emergent Grammar. In Michael Tomasello (ed.) *The New Psychology of Language, Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, 155-175. Mahwah: Psychology Press.
- Hopper, Paul and Elizabeth C. Traugott. 2003. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jakobson, Roman. 1980. *The Framework of Language*. Michigan: University of Michigan. (池上嘉彦, 山中桂一 (訳) 『言語とメタ言語』東京: 勁草書房, 1984)
- Jakobson, Roman . 1985. *Selected Writings, vol. 7*. Berlin: Mouton.
- 加藤陽子. 2010. 『話し言葉における引用表現—引用標識に注目して—』東京: くろしお出版.
- 久野暲. 1978. 『談話の文法』東京: 大修館書店.
- 甲田直美. 2013. 「名詞修飾節による『語り』の終結—『みたいな』『っていう』の表現性と談話機能」児玉一宏・小山哲春 (編) 『言語の創発と身体性—山梨正明教授退官記念論文集』431-447. 東京: ひつじ書房.
- Lehmann, Christian. 1995. *Thoughts on Grammaticalization*. Unterschleissheim: Lincom Europa.
- 益岡隆志. 1978. 『命題の文法』東京: くろしお出版.
- 益岡隆志. 2000. 『日本語文法の諸相』東京: くろしお出版.
- 益岡隆志. 2008. 『叙述類型論』東京: くろしお出版.

- 南不二男. 1993. 『現代日本語文法の輪郭』 東京: 大修館書店.
- 三原嘉子. 1995. 「接続助詞『ケレドモ』の終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』 (2): 79-89.
- 三上章. 1955 [1972]. 『現代語法新説』 東京: くろしお出版.
- メイナード泉子. 2008. 『マルチジャンル談話論—間ジャンル性と意味の創造—』 東京: くろしお出版.
- Mrocynski, Robert. 2012. *Grammatikalisierung und Pragmatikalisierung, Zur herausbildung der Diskursmarker wobei, weil und ja im gesprochenen Deutsch*. Tübingen: Narr Verlag.
- 日本語記述文法研究会. 2006. 『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』 東京: くろしお出版.
- 仁田義雄. 1995. 『複文の研究』 東京: くろしお出版.
- Ohori, Toshio. 1995. Remarks on suspended clauses: A contribution to Japanese phraseology. In Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson (eds.), *Essays in Semantics and Pragmatics*, 201-218. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Ohori, Toshio. 2000. Framing effect in Japanese non-final clauses: toward an optimal grammar-pragmatics interface. *Berkeley Linguistic Society* 23: 471-480.
- 沖裕子. 2006. 『日本語談話論』 大阪: 和泉書院.
- 三枝令子. 1999. 「提題の『ってば』『ったら』—『殊美ったら、無茶言わないでよ』—」『一橋大学留学生センター紀要』 2: 1-11.
- 佐治圭三. 1991. 『日本語の文法の研究』 東京: ひつじ書房.
- 佐藤勢紀子. 1993. 「言いさし『が／けど』の機能—ビデオ教材の分析を通じて—」『東北大学留学生センター紀要』 2: 40-49.
- 白川博之. 1991. 「『カラ』で言いさす文」『広島大学日本語教育学科紀要 第2部』 39: 249-255.
- 白川博之. 1996. 「『ケド』で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』 6: 9-17.
- 白川博之. 2009. 『「言いさし文」の研究』 東京: くろしお出版.
- 曹英南. 2000. 「『けど』で終わる発話の語用論研究: 『言い終わり』の『けど』を中心に」お茶の水女子大学日本言語文科学研究会『言語文化と日本語教育』 89-100.
- 砂川有里子. 2006. 「『言う』を用いた複合辞—文法化の重層性に着目して—」藤田保幸・山崎誠 (編)『複合辞研究の現在』 大阪: 和泉書院.
- 鄭栄愛. 2010. 「会話文に見られる終助詞化した『……けど』の配慮表現について」『研究会報告』 29: 4-45.
- Traugott, Elizabeth C. 2003. Constructions in Grammaticalization. In Brian Joseph and Richard Janda (eds.), *The Handbook of Historical Linguistics*, 624-647. Malden: Blackwell.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.

辞書

- グループ・ジャマシイ. 1998. 『日本語文型辞典—教師と学習者のための』東京: くろしお出版.
- 松岡弘 (監修). 2000. 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京: スリーエーネットワーク.
- 友松悦子 他. 1996. 『どんな時どう使う日本語表現文型 500』東京: アルク.
- 友松悦子 他. 2000. 『どんな時どう使う日本語表現文型 200』東京: アルク.
- 友松悦子 他. 2010. 『どんな時どう使う日本語表現文型辞典』東京: アルク.

インターネットからの引用元

- 布袋×大橋 「布袋寅泰×大橋トリオ対談」HOTEI Com - Tomoyasu Hotei Official Website. Hotei 30th Anniversary Project. (<http://www.hotei.com/special/conv/ohashi/>)
- あなたに 「関谷春子さん」あなたに会いたい! -over a cup of coffee. 関屋春子さんインタビュー. (<http://anatani-aitai.com/haruko-sekiya/hs01>)
- 清水建設 清水建設 CM「夢から未来」篇. (https://www.shimz.co.jp/about/activity/ad_sec30-05.html)
- 脳トレ 「脳トレをやり過ぎると危険! ?...そんな話」探偵ファイルスパイ日記. 2008年4月8日更新. (http://www.tanteifile.com/diary/2008/04/08_01/)

TV 番組

- リンカーン 「リンカーン秋の2時間スペシャル 祝!4年目突入! 熱海島一周サバイバルレース」『リンカーン』出演: 浜田雅功・松本人志 (他), 2008年9月16日 (火) 21:00-23:04 放映. TBS 系列.
- ミュージックジャパン 『ミュージックジャパン』司会: Perfume / ユースケ・サンタマリア. 2014年11月3日 (日曜深夜) 0:19-0:49 放映. NHK.

小説

- ゼロ 『永遠の0』, 講談社〈講談社文庫〉, 百田尚樹 (著), 2009年.

トランスクリプト記号

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|---------------|
| (1.0) | 空き (秒数) | (↑) | イントネーション (上昇) |
| (.) | 0.2 秒以下の看取できる空き | (↓) | イントネーション (下降) |
| | 同時発話の開始点 | [h] | 話者の息音 |
| ー | 長音 | (xxx) | 不明瞭な発話 |
| [...] | トランスクリプトの省略 | | |

On Functions of Japanese *~toiu* in So-called Suspended-sentence: An Investigation on Usage as a Sentence-final Particle

Takashi Uemura

In this paper I focus on the functions of *~toiu* (*~teiu* as one of the colloquial variants) in discourse and take an empirical study on it. Based on data which is recorded from discourse, I analyze, although *~toiu* is regarded originally as “suspended-sentence” type element, it can actually be used by speakers to combine their statement with preceding ones, or to mark the end of their utterance. I apply the theoretical framework of Shirakawa (2009), who proposes alternative view against traditional grammar.

A comprehensive study by Shirakawa (2009) proposes that conjunctive subordinate clauses utilizing i.e. *~kedo*, *~kara* or *~shi* can be used without main clauses in discourse level. He argues that it reveals the fact that they show a certain attitude of a speaker during a discourse.

Firstly I argue that this function does not match with any traditional categories of *~toiu* which traditional grammar of the Japanese language presents. Secondly, I categorize this usage into two categories, according to Shirakawa (2009). Then, I point out that the usage as “terminated-sentence” has a similar function to sentence-final particles, which show a certain behavior of a speaker, i.e. taking a cynical attitude towards state of affairs. Then I make an explanation on these “*~toiu*”-constructions by taking into account the metalinguistic function of “*~to* (as a quotation marker)”. I assume that *~toiu* works as a marker of “meta-description” and draw the conclusion that it enables a speaker to express a state of affair as if one would not have been present in order to make an ironical nuance. Lastly, I show the process how *~toiu* obtain the new function in discourse level, referring to the previous description by the traditional grammarians.